

退職後の地域活動・社会的活動の意義に関する調査研究

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
 主席研究員 鈴木征男

1. 研究の背景

- (1) 団塊世代の大量退職の始まり
 (2) 職業からのリタイアは、ライフデザインの再構築を求めている

サラリーマンにとって仕事とは、

- ①生活を維持するための所得をもたらす
- ②毎日の生活行動を秩序立て、
- ③個人にアイデンティティの感覚を与え、
- ④社会関係の基礎となり
- ⑤人々に有意義な人生体験をもたらすものである。

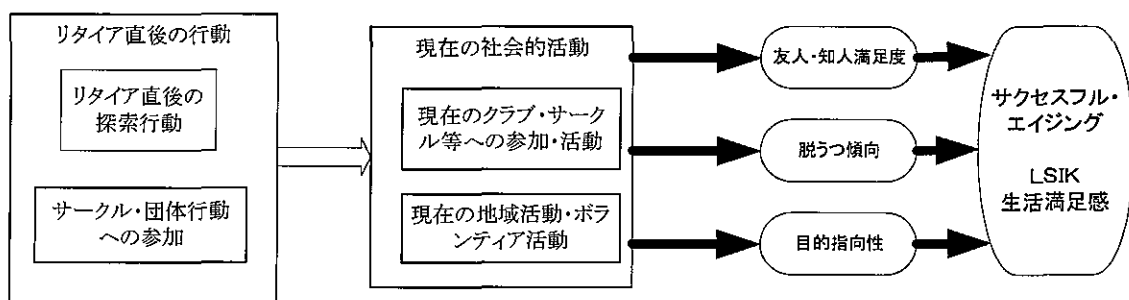
- (3) 社会的行動・活動の重要性
 (4) リタイア直後の準備行動が、その後の活動の方向性を決める

「インプリンティング理論」

この理論は、孵化したばかりのひな鳥に動き回る対象を見せると、あたかもそれが親鳥であるかのように追いかけて、他のものは見向きもしなくなる現象を人間の乳幼児の学習にも適応できると考えから始まっている。すなわち学習内容によっては、その時期に行われないとそれ以降は成立しにくくなる時期（これを「臨界期」という）があるという考え方である。

2. 研究仮説と調査概要

- (1) 調査研究の全体的フロー（図表 1）



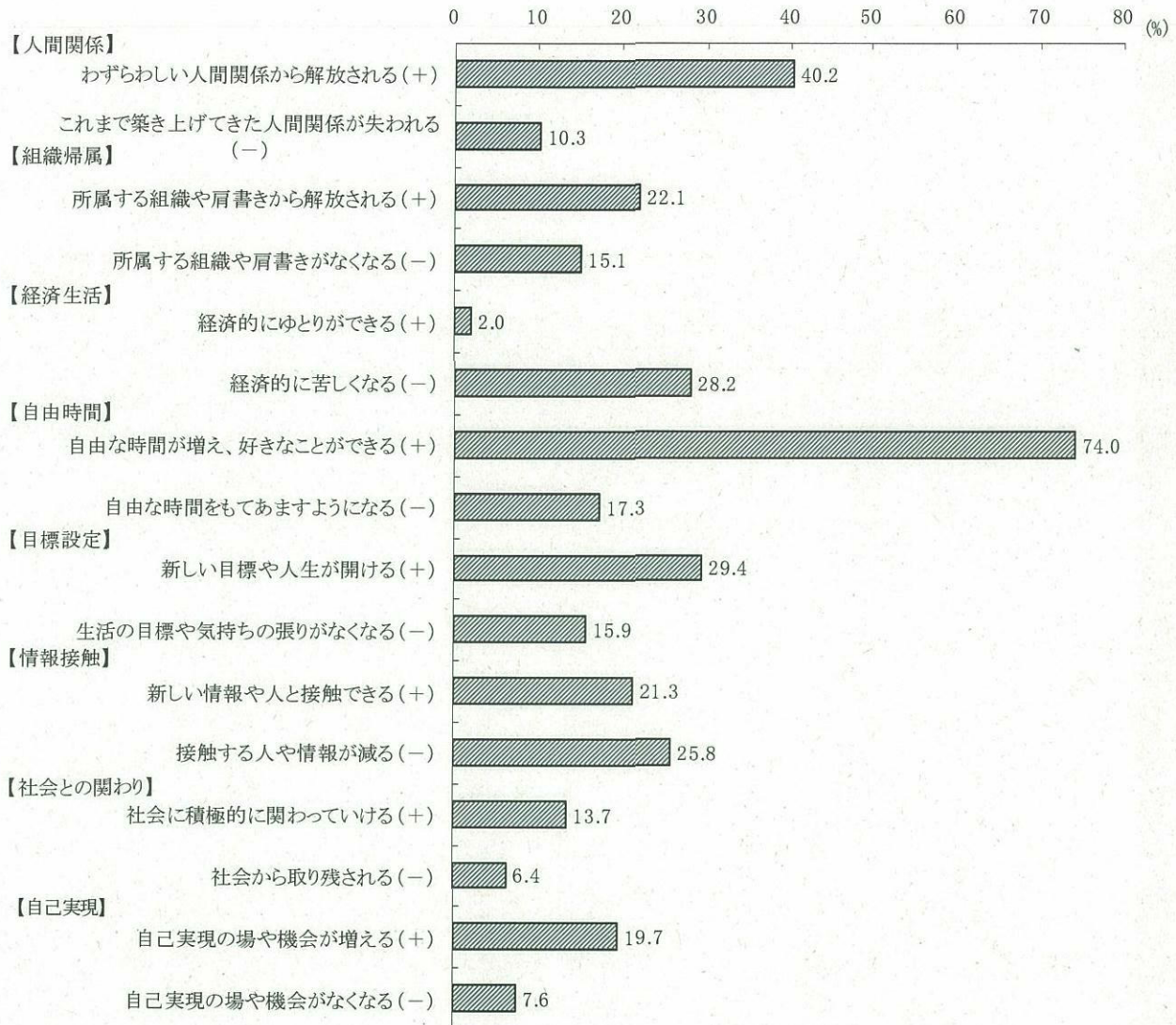
(2) アンケート調査概要

- 1) 調査対象：60～79歳の無職男性（基本的にサラリーマン退職者）
- 2) 調査対象地域：全国（当研究所生活調査モニター）
- 3) 調査時期：2006年11月
- 4) 調査方法：郵送法
- 5) 回収状況 発送数：791名、有効回収数 497名（有効回収率：62.8%）
- 6) 対象者の属性

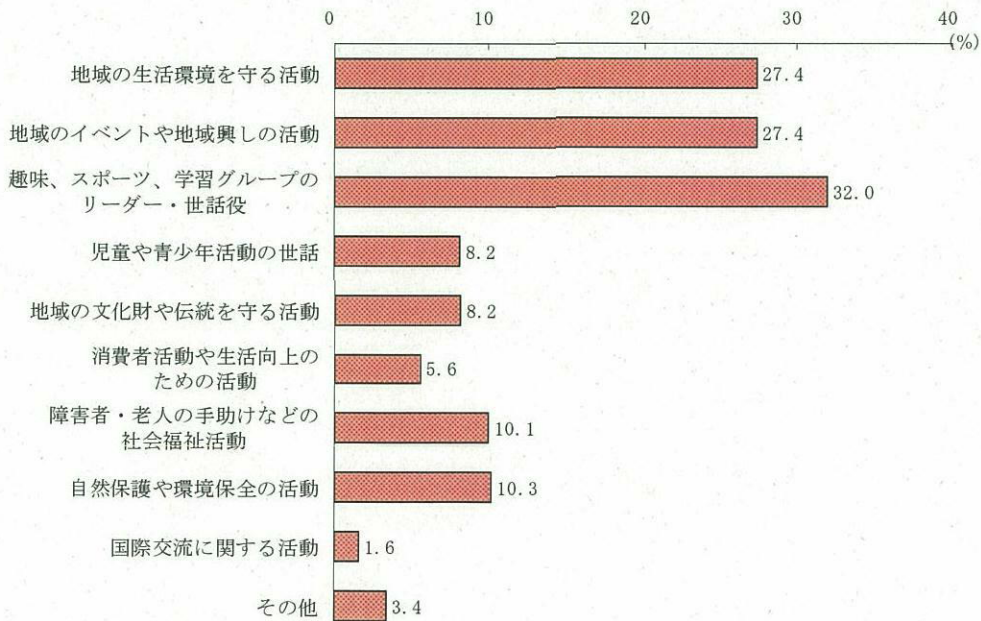
図表 2 最終リタイア年齢（現在年齢別）（単位：％）

	最終リタイア年齢						全体 (人)
	59歳以下	60歳	61～64歳	65歳	66歳以上	無回答	
現在年齢	60～64歳	23.5	54.4	22.1	0.0	0.0	68
	65～69歳	8.1	34.8	37.3	16.1	3.1	161
	70～74歳	4.5	19.6	21.2	23.5	30.7	179
	75～79歳	2.4	14.6	13.4	20.7	48.8	82
	無回答	42.9	14.3	14.3	14.3	14.3	7
全体	8.5	28.4	25.2	17.3	20.3	0.4	497

3. 職業からのリタイアの評価 (図表 3)



4. 地域活動・ボランティア活動の参加率 (図表 4)

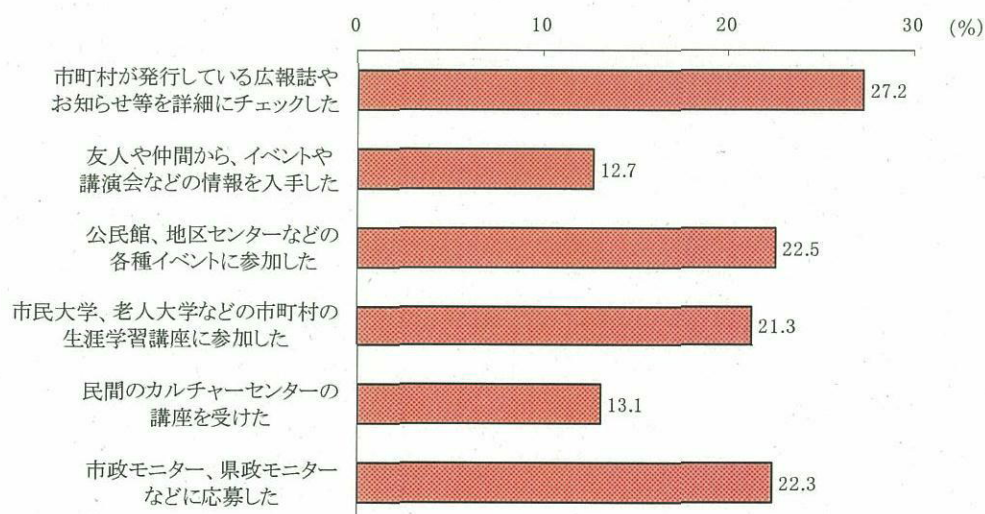


図表5 地域活動・ボランティア活動の参加・活動率（最長勤務先別）＜複数回答＞（単位：％）

	地域の生活環境を守る活動	地域のイベントや地域興しの活動	趣味、スポーツ、学習グループのリーダー・世話役	児童や青少年活動の世話	地域の文化財や伝統を守る活動
100人未満(n=57)	35.5	31.6	25.0	7.9	10.5
1,000人未満(n=90)	27.7	24.1	34.8	9.8	6.3
1,000人以上(n=177)	22.6	25.1	31.8	5.6	9.2
官公庁等(n=115)	33.3	33.3	38.6	14.0	7.0

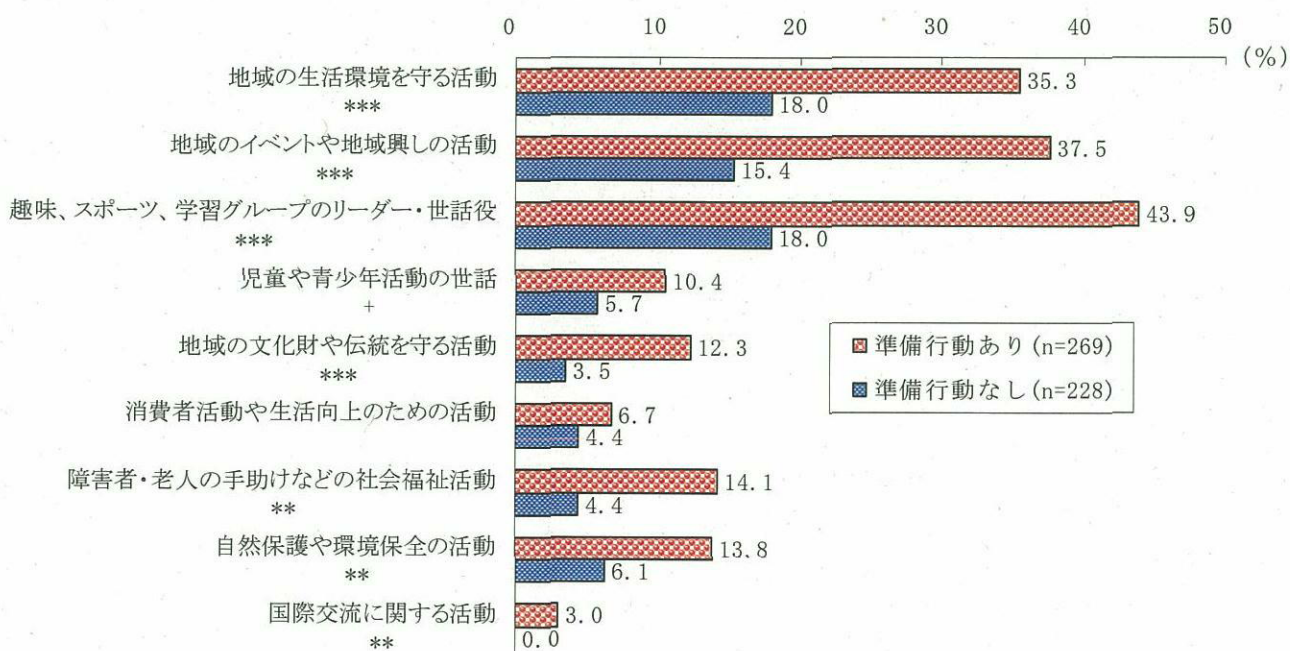
	消費者活動や生活向上のための活動	障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	自然保護や環境保全の活動	国際交流に関する活動	その他
100人未満(n=57)	9.2	10.5	9.2	1.3	5.3
1,000人未満(n=90)	4.5	11.6	11.6	1.8	3.6
1,000人以上(n=177)	5.6	8.2	9.7	2.1	3.1
官公庁等(n=115)	5.3	12.3	7.0	0.0	3.5

5. リタイア直後の社会的準備行動（図表6）

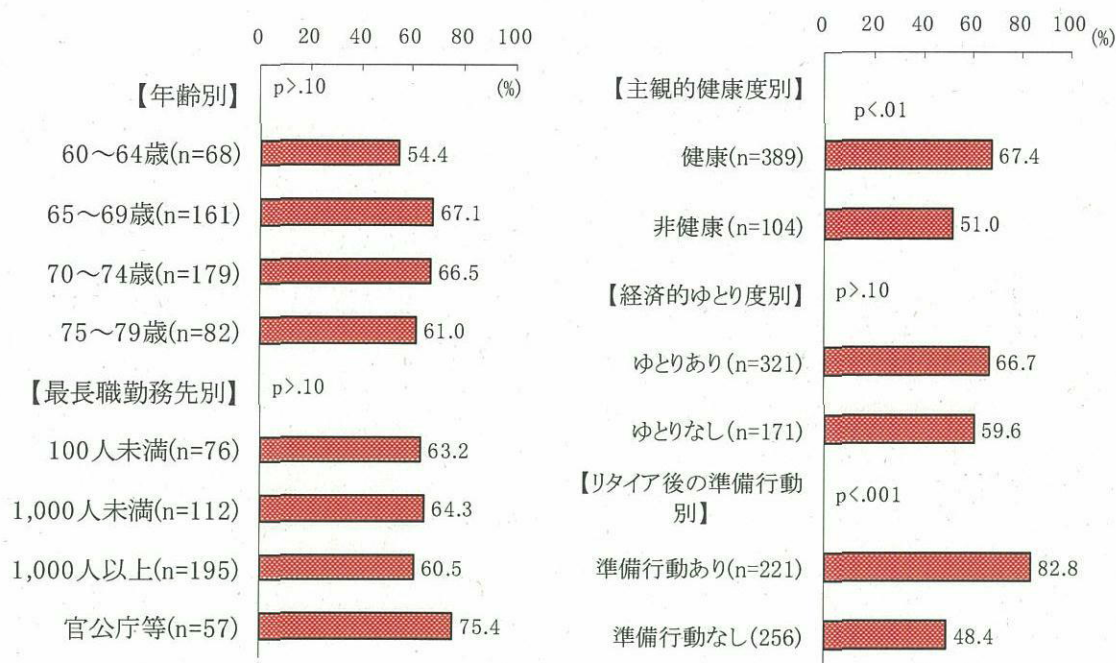


6. 社会的準備行動の効果

図表7 現在の地域活動・ボランティア活動参加率（準備行動の有無別）



図表8 何らかの地域活動・ボランティア活動参加率の比較



図表9 地域活動・ボランティア活動の参加・非参加への影響 (ロジット分析結果)

	オッズ比
社会的準備行動(準備行動あり=1)	5.545 ***
健康感(健康=1)	1.402
経済的ゆとり感(ゆとり感あり=1)	1.345
最長職勤務先(官公庁=1)	1.879 +
年齢(60代=1)	0.981
-2 対数尤度	489.898
Nagelkerke R ²	0.2218
サンプル数	432

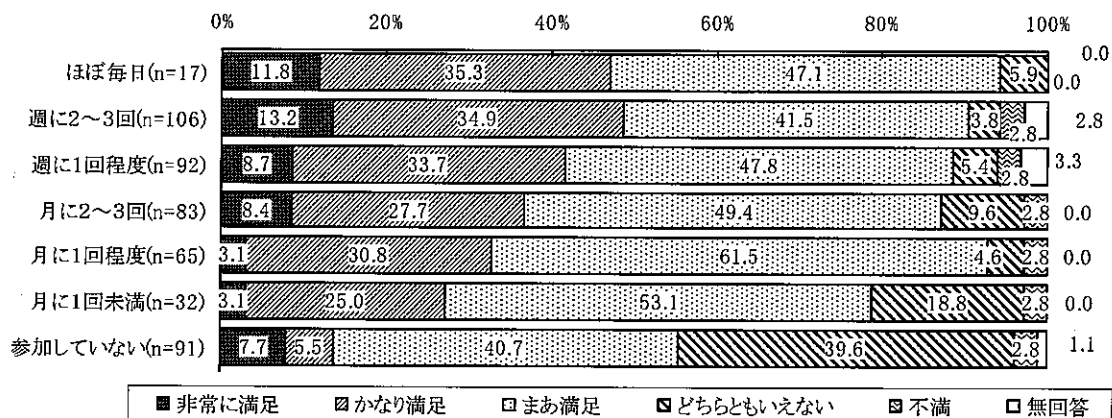
7. 地域活動・ボランティア活動の友人・知人満足度との関連性

(1) 個別地域活動・ボランティア活動の友人・知人満足度

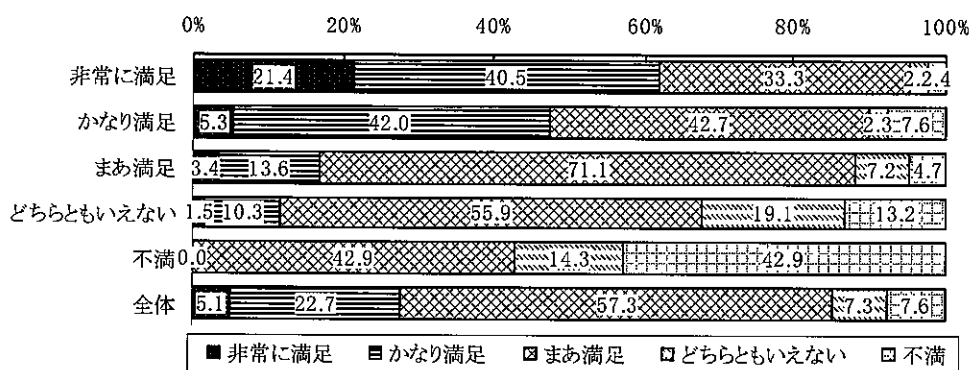
図表10 地域活動・ボランティア活動の活動・参加別友人仲間関係満足度の平均値の差の検定

活動内容		n	友人・知人満足度平均値	差	t-値
地域の生活環境を守る活動	非参加	361	5.011	0.540	4.947 ***
	参加	136	5.551		
地域のイベントや地域興しの活動	非参加	361	5.089	0.257	2.308 *
	参加	136	5.346		
趣味、スポーツ、学習グループのリーダー・世話役	非参加	338	5.083	0.238	2.235 *
	参加	159	5.321		
児童や青少年活動の世話	非参加	456	5.125	0.412	2.281 *
	参加	41	5.537		
地域の文化財や伝統を守る活動	非参加	456	5.127	0.385	2.133 *
	参加	41	5.512		
消費者活動や生活向上のための活動	非参加	469	5.139	0.361	1.675
	参加	28	5.500		
障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	非参加	447	5.128	0.312	1.891
	参加	50	5.440		
自然保護や環境保全の活動	非参加	446	5.123	0.347	2.122 *
	参加	51	5.471		
国際交流に関する活動	非参加	489	5.153	0.347	0.875
	参加	8	5.500		
その他	非参加	480	5.140	0.566	2.072 *
	参加	17	5.706		
どれも参加していない	参加	331	5.332	-0.519	-5.031 ***
	非参加	166	4.813		

図表 11 地域活動・ボランティア活動の活動頻度別の友人・知人満足度

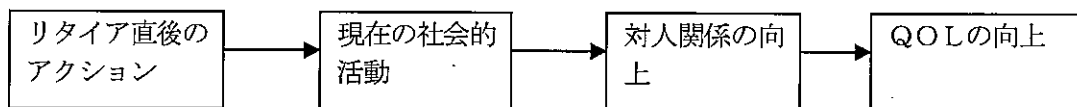


図表 12 友人・知人満足度と生活満足度



(2) 社会的準備行動の意義

今回のもう一つの柱は、このようなリタイア後の社会的活動を展開する上で、リタイア直後（ここでは1年間と区切ったが）の準備行動を始めることが、その後の社会的活動を活発化させるという「インプリンティング」モデルを検証しようとしたのである。この点についても個々の準備行動の有効性はともかくとして、全体として何らかの活動、準備行動をとった方が現在の活動に結びついていることは証明された。これらを図示すると以下のとおりである。



8. 今後のリタイア高齢者に対する自治体の対応へのインプリケーション

(1) 生涯「学習」の視点

仕事からリタイアしても、さらに前向きに生きていくような態度を身につけたいものである。リタイアしたからもう進歩はなくていいのだということではなく、リタイアしたから、第2の人生でさらに新しい道を切り開いていくという姿勢が大切である。その意味で「学習」の考え方は大事である。ここでいう「学習」は何も学問分野でなくてもよい。趣味や運動、スポーツ、ゲームなどあらゆる分野で「学習」していくのである。

人間は年を取るに従って記憶が衰えていくことはよく知られている。しかし、これまで学習したことの新しい種類の学習に関しては、加齢に伴って学習速度は低下するものの、習得は可能である。学習した結果の再生も相当高い水準でも維持可能である。最近の生涯発達心理学という新しい学問領域で示された事実である。そして、そのことが「自分もやればできる」という「自己効力感」を高め、前向きな生活を送ることを可能にしている。生涯学習は高齢者にこのような意義を与えることを忘れてはならない。

(2) 高齢者が地域で活動できる能力を高める視点

生涯学習を受講する中で、博物館や美術館で説明するためのボランティアになったり、福祉施設でのボランティア活動を展開したり、様々な地域での活動ができるような能力を身につけることも重要である。単に、自らが学ぶだけでなく、学んだ成果を地域に還元するとか、あるいはボランティア活動に活かすことができるような仕組みを考える視点が必要であろう。また、学んだ知識や技能が社会に役立てることができれば、さらに学習意欲が湧くものである。さらに、このような活動を通じて、新しい地域のリーダーを育てるという視点が重要である。

(3) 仲間づくりを支援する視点

市民大学、老人大学、生涯学習講座などを終えた後に自分達でグループを作り、それが将来的に地域活動やボランティア活動のベースになるような仲間となるケースが多い。しかし、人数があまりにも多いと、このようなグループはできない。こうした場合、参加者を少人数のグループに分けて、グループ毎に自分達で実践する課題を与えるような運営をすることも考えられる。こうすることで、少人数のグループが一定の期間、行動を共にすることで、修了後、継続したグループ活動が生まれやすいと考えられる。筆者はある自治体で生涯学習の講師を務めているが、この講座では、1回のコースにつき10回程度の講演会や見学会などを行っている。ここでは40名程度の参加者を8名ずつの5グループに分けて、グループ毎に活動させており、参加者同士の交流を深めている。

(4) 地域の資源の有効活用

地域には多くの場合、図書館や博物館などの公共施設がある。さらに、大学などの教育機関が存在するところもある。こうした施設では市民向けに様々な講座を開催している。大学などが公開講座を持っているところも多い。こうした公共機関の講座と提携したり、統合したり、あるいは相互連携などで有効活用していく姿勢が必要であろう。

(5) 企画に住民、とりわけ高齢者を参加させる視点

これらの自治体の企画には、利用者の意見を取り込むことが必要である。とりわけ、高齢者は自由時間が多く、モラルも高い人が多い。さらに、サラリーマン現役時代には各分野での専門知識や、技術を持っている人もいる。また、講座を学んだ経験を持っており、企画段階でこのような人を有効活用して、受講者が利用しやすい講座や学習内容を作成していくことが必要である。

(6) 達成感を与える視点

必ずしも高齢者だけにいえることではないが、それぞれの講座を終えたときには修了証などの証明書を与えることが、受講した人の達成感を高める上で重要である。特定の活動を行う場合は、この修了証がないと参加できない、といった資格につながるとさらに価値が高まる。

(7) インターネットを活用する視点

今や、インターネットには多くの人が接する機会を持っている。こうした生涯学習においてインターネットによる情報提供は最高の手段である。これを十分活用するような仕組みを作りたいものである。高齢者の中には、まだインターネットになじんでいない人も多いが、このような人に対しても、講座を通じて利用の促進を図ることが必要であろう。

(8) ソーシャル・キャピタルの向上という視点

高齢者が地域で守られ、また活動を展開することは、社会的なネットワークの拡充につながり、地域社会が高齢者の自立を促したり、事故や犯罪を未然に防ぐ力が地域に育つのである。最近はやりの言葉で言えば「ソーシャル・キャピタル(社会的関係資本)」の拡充という視点も重要である。

以上